

[illegible]

太平記の世界

変革の時代を読む

日本放送出版協会

永積安明 上横手雅敬 桜井好朗

太平記の世界 変革の時代を読む

定 価——2,300円

発行日——昭和62年12月20日 第1刷発行

著 者——永積安明

上横手雅敬 (検印廃止)

桜井好朗

©1987 Yasuaki Nagazumi Printed in Japan

Masataka Uwayokote

Yosirō Sakurai

発 行——日本放送出版協会

〒150 東京都渋谷区宇田川町41-1

電話 464-7311 (代表) 振替・東京1-49701

印 刷——図書印刷株式会社

製 本——株式会社 石津製本所

装 幀——鈴木一誌

ISBN4-14-008561-4 C1021 ¥2300E

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

太平記の世界

変革の時代を読む

『太平記』は、南北朝の内乱といわれる十四世紀のおよそ五十年を超える長い期間、しかも日本の歴史がはじまって以来、かつてなかったほどの激しい全国的な大動乱を対象にしています。

この全日本を揺るがして沸騰した内乱によって、それまでの莊園制度を基礎として権力を握っていた王朝貴族や社寺の勢力は決定的な打撃を受け、室町幕府を中心とする武家政権が成立し、それに伴って全国の農山漁村の名もない民たちが、圧制をはねのけて次第に自立の道をたどりはじめるなど、人びとは、そのころ中世という歴史の曲り角を切りひらいて行ったのですから、『太平記』という作品は、日本人の体験した未曾有の重大事件を取り上げていることになります。

近ごろ歴史的な大事件を対象に据えた作品を、大河小説などと呼んだりしていますが、『太平記』こそ半世紀にわたる時代や社会的氾濫の全体像を描き切った、本来の意味での大河作品と呼ぶにふさわしい、日本の代表的な物語であつたに相違ありません。

ところで『太平記』は、そういう歴史的な大事件を対象にしているのですから、わたしたちがこれから作品を読んでゆくにも、対象として取り上げられた歴史的な事実を知っておくことが望ましいわけ、いわば、一方では『太平記』という虚構によって創り出された文学作品としての世界を、他方では『太平記』時代の社会やその時代精神等を、同時に両方から追跡してゆけば、いっそう『太平記』の全体像がはつきり見えてくるに相違ありません。そこで本書の企画としては、上横手雅敬氏と桜井好朗氏との二人の歴史家に参加を願ひ、あるいは政治・社会的な、あるいは文化史また精神的な観点から、広く『太平記』の世界を照射していただくことにしました。

さいわい、わたしたち三人はそれぞれ専門を異にしていますから、当然おのおの独自の発想によって論を進め、お互いの意見を補い合いながら、できるだけ『太平記』の全体像を多面的に捉えるようにしたいと思います。

なお、わたしたち三人は一九八二年十月から八三年三月までの半年間にわたり、NHK市民大学講座として「太平記の世界」を放映したことがあります。今回の企画も、この講座を読みものとして再現することを期して出発したのですが、その後数年の間に、『太平記』の研究も急速な進歩を遂げて来ました。そこで今回は、最初の企画に必ずしもとらわれることなく、新しい構想のもとに稿を改めて「太平記の世界」を展望することにしました。

終りに、本書の出版に当っては、日本放送出版協会の道川文夫・福地明博の両氏に、挿絵の選定にいたるまで周到的配慮をいただきました。改めて深謝の意を表する次第です。

一九八七年十二月一日

永積安明

目次

はじめに 2

序章 『太平記』の魅力 7

第一章 『太平記』の構造……………19

1 『太平記』の構想 20

2 『太平記』と『平家物語』 35

3 歴史書としての『太平記』 50

第二章 『太平記』の立役者たち……………63

1 護良親王——武家よりも君がうらめし—— 64

2 楠 正成(一)——悪党の戦術—— 78

3 楠 正成(二)——天下、君を背きたてまつる—— 95

4 後醍醐天皇——朕が新儀は未来の先例—— 108

5 新田義貞——怒れる心あれど、礼儀みだりならず—— 121

6 足利尊氏——疾く遁世したく候—— 135

7 佐々木道譽——婆沙羅大名—— 154

8 高師直——乱世の驕雄—— 164

第三章 『太平記』の社会……………181

1 観応の擾乱 182

2 「飢人身ヲ投グルコト」——動乱の犠牲者たち—— 199

3 内裏と幕府 212

4 あぶれ者たち 229

5 落首の世界——京童の口ずさみ—— 244

第四章 『太平記』の諸相……………257

1 『太平記』と『神皇正統記』 258

2 「不思議」と未来記 271

3 南朝君臣の怨霊 287

4 鎮魂と芸能 300

第五章 『太平記』の成立と流布

1 『太平記』の成立と作者——「卑賤ノ器、小島法師」—— 318

2 『太平記』の思想 334

3 「太平記読み」——享受者の世界—— 349

終章 結末なき終焉 359

おわりに——再び『太平記』の魅力について—— 369

『太平記』関係年表 372 参考文献 382

*執筆分担…はじめに 序章 第一章1・2 第二章2・7・8 第三章2・5 第五章1・2・3 終章

おわりに…永積安明

第一章3 第二章1・3・4・5・6 第三章1・3 関係年表…上横手雅敬

第三章4 第四章1・2・3・4…桜井好朗

写真撮影…永野鹿鳴荘（八髻文殊菩薩騎獅像〈般若寺藏〉）、日并貞夫（足利尊氏木像〈等持院藏〉）

カバー（表）…『声引絵巻』〈逸翁美術館藏〉（裏）…『祭礼草紙』〈前田育徳会尊経閣文庫藏〉

表紙…西源院本『太平記』〈龍安寺藏〉 東京大学史料編纂所

序章 『太平記』の魅力

「太平記の世界」を展望しようとする最初の一章に、「『太平記』の魅力」という標題を掲げましたが、じつはこれから二十五項にわたって展開する一回一回が、それぞれ『太平記』の魅力をさまざまな角度から照らし出してゆくことになるはずですから、最初に特にこういう標題を掲げたのには、それだけの理由があるわけです。つまり以下、それぞれの章にわたって解説される「太平記の世界」の全体を貫く、いわば作品の地盤あるいは基本になるような、ある統一的な精神があつて、そこから、『太平記』の魅力は生れてくるのではないだろうかという考えから、まず、これを総括的に捉えてみることにしたわけです。

『太平記』以前の文学

そのためには、『太平記』が生れるまでの文学の世界を、ここでいちおう振り返ってみることが必要になってきます。

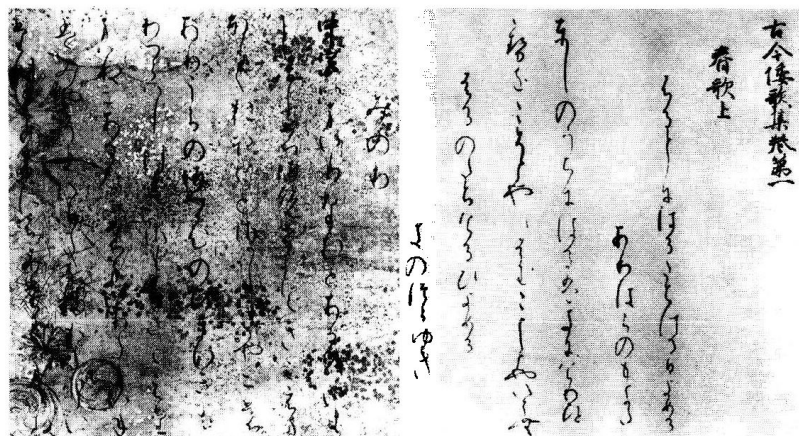
いったい日本文学の流れの中で、『太平記』や『平家物語』などの軍記文学以前の作品といえ、まず王朝時代の文学が考えられますが、その中でいちばん大切にされた文学はといえば、何といつても『古今和歌集』をはじめとする和歌系列の作品でありました。いうまでもなく『古今集』は勅撰和

歌集の随一、つまり天皇の權威によって公認された文学です。いってみれば『古今集』こそは当時のいわば第一文学であつたと考えられます。その和歌文学の系列と並んで、もう一つの重要な文学の流れが、『源氏物語』を中心とする物語文学、またこれと雁行して書き継がれた女流日記文学の流れでした。この二つの文学系列が、何といつても『平家物語』や『太平記』などが軍記文学として成熟するまでの文学の主流になつていたはずです。

ところが、これら王朝時代の文学作品は、どれも仮名文字で書かれていたことはご存じのとおりです。しかし、この仮名文字は王朝時代の人びとにとっては女文字と考えられていました。もちろん男性も仮名文字を使用していましたが、本来の男の文字はまづ漢字であり、彼らは漢文によつて文章を書くのが普通でした。だから日記を記すとしても女は仮名で書き、男は漢字で書くのが、いわば常道でした。たとえば当時の大貴族、藤原道長の記した公私にわたる記録である『御堂関白記』などにしても、続いて少し時代は下りますが、鎌倉時代まで書き継がれた藤原定家の『明月記』にしても、原則として漢文によつて記されています。だからもし当時の男性が、こういう日記を仮名で書いて公にしようとする、たとえば『土佐日記』がその巻頭に、

男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり。

つまり、男の人も書くという日記というものを、女のわたしも書いてみようと思うのですと、作者の紀貫之も、わが身を女性に仮託して書くことになるのですが、男性が仮名文で日記を書くには、当時としてはそのほうがふさわしかったからです。それほど男性の常用する文字と女性の慣れ親しんでいた文字とは、それぞれはつきり区別されており、男性は男文字としての漢字を、女性は女文字としての仮名文字を使用するのが、ごく普通の仕来りでした。



「高野切」(右)と「御法」(左) (五島美術館蔵)

女性の文学

そういった女たちの書き記すのが普通の習慣であった、仮名文字による文学の流れの中で、いちばん尊重された、いわば時代の第一文学としての『古今和歌集』のような叙情詩の文学の方法が、同じ時代の物語文学や女流日記文学に対して、とりわけ深い影響を与えていたであろうことは、ここに掲げる『古今集』や『源氏物語』など、当時の仮名文字で写された文献の筆跡を一瞥すれば端的に実感されるでしょう。たとえば、上に見られる「高野切」と呼ばれる写本の断片は、『古今集』巻頭の、

としのうちはるはきにけりひととせをこそとやいはむ
むことしとやいはむ

という有名な一首を写したのですが、その筆跡の墨付きには連綿体といわれているとおり、高雅なりズムをもって淀みなく流れて行くような独自の筆致が見られます。続いて掲げられている『源氏物語』の「御法」の巻の写本も、王朝時代の高度の美術品として評価されている有名な『源氏物語絵巻』の一部ですが、全く同様な墨付きによっており、二つの筆跡を並べて見ますと、ほとんどそのまま連続

してしまい、あわせて平安朝貴族の繊細で優雅な文化の姿が、一目でわかるというような作品であります。王朝時代の物語や女流日記文学の流れと和歌文学の流れとが、物語とか和歌とかいう形式の相違を超えて、どんなに相通じていたかということは、これらの筆の跡を一見するだけで直観できるほどのものと思われれます。

このような仮名文つまり和文によって記されている物語文学や女流の日記文学は、およそ作者が人間の心の奥所にまで降り立って行き、その内部の隈ぐままでを克明に描き出すことによって、人間の精神を解き放つという独特の機能を持っているものですが、そういう物語や日記文学などに対して、これから取り上げる『太平記』や『平家物語』のような軍記文学の作品は、全く別の世界を作り出しているということが、以下に述べる一節によって領解できると思いますので、まず軍記文学そのものの世界へ入ってみましょう。

軍記文学の世界

ところで、軍記文学のいちばん最初に出てくる作品は何かといえ、いうまでもなくそれは平将門が主人公として活躍する『将門記』です。『将門記』は、物語文学の最初の作品として、平安時代の初期に生れた『竹取物語』を引き継ぐように成立した作品ですから、軍記文学の先頭に立つ作品ですが、文章はすべて漢文で書かれています。また『将門記』の成立からおおよそ一世紀ほど後には、東北地方の陸奥国の叛乱鎮定記として『陸奥話記』が生れますが、これも『将門記』と同じように漢文で記されています。つまり軍記文学の初期を代表する二つの作品はともに全くの漢文で書かれており、軍記文学の流れには、男文字の伝統が深ぶかと伝わっていることになります。もちろん軍記文学



覚一本「平家物語」(右)(龍谷大学図書館蔵)と西源院本「太平記」(左)(龍安寺蔵)

は中世になると次つぎ成立し、文学作品としても次第に成熟してきます。そうして鎌倉時代に入るといわばその円熟期を迎え、やがて『平家物語』や『太平記』のような大作品が成立したことはご存じのとおりです。そうなる、その文章も単に漢文だけでなく、『源氏物語』などの物語文学で成熟してきた和文の長所を捉え、また同時にこれまでの軍記文学で使い慣れていた漢文的な表現も同時に取り入れる、つまり和漢混淆文という形式の表現が熟してくるわけで、その代表的なものが『平家物語』ということになります。ここに掲げましたのは『平家物語』の中で最も広く読まれている「覚一本」と呼ばれる系統の平仮名交じりの写本ですが、『平家物語』にはそのほかにもいろいろな形式の伝本があり、「覚一本」などよりもっと古い、たとえば鎌倉末期に近い延慶二(三年(一三〇九—一〇)の交に写された証拠があるので「延慶本」と呼ばれている写本もあります。この本は語り本ではなくて読み本の代表的な伝本ですが、漢語が多くて漢文表現の痕跡がはっきり残っています。続いて語り本の中で最も古い「屋代本」なども、片仮名で訓読しているところが残っていたりして、たいへん漢文的な表現になっています。つまり『平家物語』のような物語的に成熟した軍記作品でも、漢文の影響、つまり男性的な漢文表記の伝統はなお連綿として続いていることが、こ

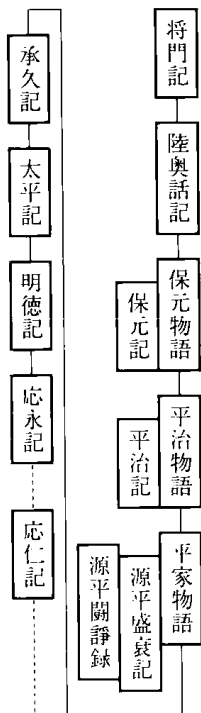
これらの古写本を一瞥^{いちべつ}するだけで領解できるはずです。

それでは『太平記』はどうでしょうか。『太平記』も古い系統の写本で「西源^{せいげん}院本」という、石の庭で有名な京都の龍安寺に蔵せられている伝本などは、たいへん漢字が多いのです。また専門家が『太平記』の中でいちばん古い本だと認めている「神田本」なども、同様に漢文表現の跡がはっきり残っています。つまり『太平記』の仲間である軍記文学の系列には、和歌や物語文学などと違って男性的な表記、つまり漢文表現の傾向がまことに色濃く伝えられているのです。

いま主として表現形式の側面から軍記文学の作品系列を見てきましたが、ここで少し内容について考えてみますと、まず軍記文学はいずれも『源氏物語』をはじめとする王朝物語文学のように、どちらかといえば人間の内面を克明に描くというよりは、人間を取り囲む広い外部へ目を注ぎ、そこに展開される人間の葛藤、社会の対立などを描き進める傾向が強く、しかもそれらは、およそ年代記的に書き継がれています。そうした軍記文学の性格は、主要な作品を列記した次ページの表によっても領解できるかと思えます。

軍記文学の年代記性

まず初期の軍記文学は『将門記』も『陸奥話記』も、ともに「記」を名乗っています。二つの作品はいずれも平安時代の軍記の代表作品ですが、中世に入りますと軍記文学も、『保元物語』『平治物語』『平家物語』と、続いて「物語」と呼ばれるようになります。これらは先に見てきました和漢混淆文の形式に見合う、軍記文学としては著しく物語的な内容を深めた作品群の場合ですが、そうした作品でさえ、たとえば『保元物語』も『平治物語』も、古い写本の中には『保元記』『平治記』と表



軍記文学作品略表

記されているものがあり、軍記文学の中で最も物語的な傾向の豊かな『平家物語』でさえも、その異本には、歴とした『平家物語』でありながら『源平盛衰記』、『源平闘諍録』などと、「記」や「録」つまり「記録」的作品であることを、その名称にも明示しているものさえあります。

つまり軍記文学はもともと「記」の文学であり、少なくともそうした傾向を痕跡として残している作品でした。したがって、そのあとに続くのも『承久記』『太平記』『明德記』『応永記』……『応仁記』などと、次つぎにおこった中世の内乱のあれこれを対象とした叙事的な作品の系列になっているのです。たとえば『平家物語』に続く『承久記』は、後鳥羽院が北条氏と戦って敗れ、隠岐島に流された大事件の顛末を記した作品ですし、やがて南北朝内乱を対象にした『太平記』が成立します。中世期にはこれに続いて明德の乱（一三九二）があり、応永の乱（一四三八）、嘉吉の乱（一四四一）、さらに応仁の乱（一四六七）と引き続く内乱のたびごとに、『明德記』『応永記』『永享記』『嘉吉記』さらに『応仁記』といった軍記文学が書き継がれ、それらはみな揃って「記」を名乗る作品として実っているのです。

それではこの「記」の文学とは何かといえ、まず記録であり、しかも年代記であるということになります。軍記文学の中で最も物語的に成熟した作品の『平家物語』にいたるまでが年代記的な性格をそれぞれみな受け継いでいるという事実を考えますと、いままで見えてきた『古今集』はいままでもなく、『源氏物語』とか女流の日記文学などとくらべてみて、軍記文学の

作品が著しく異なる性格をそなえ、独自の世界を展開していることが形式のほうからも垣間見られるのではないでしょうか。

変革期の文学としての軍記文学

そこで、こんどはもう少し内容に立ち入って軍記文学の世界を見てゆくことにします。まず軍記文学はどの作品も、およそ社会的な事件を捉え、その矛盾や対立を主題とする傾向があります。たとえば王朝末期から中世にかけて、各地から武士たちが一斉に立ち上がって、これまでの支配者であった貴族たちを、長い間彼らが占領していた京都から追い払ってしまふような、かつて誰しも想像することさえできなかった衝撃的な事件が作品の中心を占める、軍記物とか軍物語・軍記物語などと呼ばれる作品が続々と生れてきます。それらの中に『平家物語』や『太平記』は成り立っているわけです。

たとえば軍記文学の主人公を見ても、まず『将門記』の中心人物である平将門が、関東の地に立ち上がって都の天皇政府に叛逆しています。続いて『保元物語』の中で最も目覚ましく活躍する鎮西八郎為朝や『平治物語』の悪源太義平など、その名を聞くだけで強力な荒あらしい風を呼びおこしてくような人物が、物語の舞台の中心にのし上がってきます。また『平家物語』では一挙にクーデターをおこして藤原貴族を宮廷から押し退け、後白河法皇まで捕えて軟禁してしまった平清盛が中心人物となるし、さらに驕る平家を瀬戸の海に追い落とした旭の將軍源義仲、ついには平家一門を壇の浦の海に撃滅してしまった九郎判官源義経などのような強力でダイナミックな人物たちが、物語の主人公の座を占めるようになります。これらの作品群の世界が王朝時代の物語文学のそれとは全く異質のもの